# 社會批評家トシテノかあらいる（一）

石田憲次

「かあらいるノ偉大ニシテ且ツ實際的ナ事業ハ、功利主義ニ對スル攻擊デアツタ。ソレハ實際世ヲ益シタ。ヨシヤ彼カソノ代リニ唱導シタ歷史哲學ニハ、混迷且ツ危險ナル點ガ多カツタニセヨ。國家ノ殷富ハ人民ノ繁榮ニ非ズテフ當代ノ大眞理ヲ、衆人ニ先ンジテ明カニ見、明カニ說イタコトコソ彼ノ眞ノ光榮デアル。……かあらいるハ、若シまんちえすたあ富ミ榮エツアリトイフ事當レリトセバ、まんちえすたあ貧シクナリツツアリトイフモ亦當レリ、換言スレバ、まんちえすたあハ毫モ富ミツツアルニ非ズ、タダ富ミ行クモノハ、まんちえすたあノ比較的好マシカラザル人士ノ一部ナリトイフ事ヲ指摘シタ（彼ガ他ノ問題ニ關シテ顯セルニモ優ル洞察ト戲謔トヲ以テ）。コノ點ニ於テ彼ハ遙カ後ノ國民的發達ト相關聯シテ特筆サルベキデアル。蓋シ、彼ハ斯クシテ社會主義者ノ第一ノ豫言者トナツタノデアル。さあたあ・りさあたすハ天晴レノ幻樂（ファンタジア）デアル。佛國革命（フレンチ、レヴォリュション）モ、種種缺點ハアルガ、實際立派ナル一個ノ歷史デアル。英雄ニ關スル講演ハ數個ノ精妙ナル人格描寫ヲ含ンデ居ル。併シ我輩ヲ以テ考フルニ、過去ト（トゥデイ）現在及びちやあちずむ論ニ於テコソ、かあらいるハ神ト人トニ選バレテ成シ遂グル事ヲ命ゼラレタ仕事ヲ成シ遂ゲタノデアル。」

コレ[1]英國現代ノ批評家ちい・けい・ちえすたとんノ言デアル。其ノ批評ガ全ク正鵠ヲ得テ居ルカ、否カニ就テハ、多少ノ議論アラムガ、か

(1) The Victorian Age in Literature by G. K. Chesteron p. 54-p. 56. London, Williams and Norgate.

あらいるガ社會批評家トシテ如何ニ高キ位置ヲ占ムルカハ、自ラ明白デアル。

かあらいるガ勞働者ノ問題ニ留意シ、社會改良ノ必要ヲ唱ヒタノハ、夙ニ彼ノ青年期ノ事デアル。かあらいる傳者ノふるうどハ、コレヲ千八百十八年、かあらいる二十四歳ノ時迄溯ッテ傳ヘテ居ル。ソノ頃なぽれおん戰爭ノ後デ、世間ノ景氣ガ一般ニ沈滯シテ居タ。賃金ハ低廉ニシテ、食物ハ饑饉年同樣ノ價デアッタ。[1] かあらいるハ父ノイフヲ聞イタ。サウシテソノ言葉ニハ洞見ヨリ來ル强イ力ガアッタ。「貧乏人ノ境遇ハ日々益々悪クナッテ行ク、世間ハコノ儘デハ續キハセヌ、マタ續カウ筈モナイ、誰モ將來ヲ見越ス事ノ出來ヌ大變化ガ迫ッテ來ルノダ」ト。又、[1]おうとみいるガ一すとらん十志ニモナッタ物價騰貴ノ年ニハ、勞働者ガ一人一人小川ヘ引込ミ、サウシテ其處デ飯ヲ食ハズ、水ヲ飲ンデ、タダ人ニ知ラレン事ヲノミ氣ニスルノヲ見タト、彼ノ父ハイッテ居タトかあらいるハ書キ傳ヘテ居ル。其ノ頃かあらいるハソノ無二ノ親友あーヂいんぐト相會スル毎ニ、人民ノ境遇ヲ問題トシテ論ヲ闘ハセタ。彼等ハ共ニ急進主義者デアッタ。サウシテ時弊ヲ匡救スル事ノ如何ニ困難ナルカハ、ナポヨクコレヲ知ラナカッタ。

翌千八百十九年ニハ、ぐらすぢうニ急進主義者ノ暴動ガ起ッタ。ソノ頃えぢんばらニ在ッタかあらいるハ、ぐらすぢうカラ馬ニ乘ッタ急使ガ泥ダラケニナッテ、えぢんばらニ着キ、又えぢんばら地方ノ義勇兵ガ勢揃シテ、ぐらすぢう護衛ニ向フノヲ見タ併シ彼ノ同情ハ寧ロ暴徒ノ方ニアッタ。[2] 彼ハ「カカル虚僞、詐瞞、全然無意義ナル形式ノ重荷ニ對スル反抗ハ、何時カ缺クベカラザルモノトナルニ違ヒナイトイフ感ジ——ソノ中ニ、一種燥急デ、虚僞デ、半バ傲慢ナ喜ビヲ寓セル感ジ」ヲ持ッテ居タノデアル。

其後間モナク、かあらいるハ獨逸文學ノ研究者、紹介者トナリ、殊ニげえてニ傾倒シタ。併シコノ二人ノ間ニハ著シキ氣質上ノ相違ガアッタ。師ノ藝術科學ニ對スル獻身的態度、凡俗ヲ

(1) Reminiscences Vol. 1. p. 48 Chabs Scribners Sons, New York
(2) Froude: Thomas Carlyle Vol. 1. p.59 Charles Scribnes Sous, New York.

青眼ニ見テ靜ニ微笑ム觀照家的態度ハ、弟ノ到底學ビ得ルトコロデ無カツタ。かあらいるハ思索家タルト同時ニ實行家タラム事ヲ欲シタ。彼ハ所謂「簡易ナル生活、高尚ナル思索」ノ清福ニ憧憬レナガラモ、一方英國ノ現狀ヲ見テハ、カカル時代ニカカル事ニアクガルル事ソレ自身ガ既ニ一種ノ利己心ニアラザルカヲ思ツタ。當時かあらいる心中ニ往來シタ思想ハ、ヨクコレヲふるうどノ頁ニ認メル事ガ出來ルノデアル。

(1) 千八百三十年九月九日ノ日記ノ一節ニイフ。

「現代ノ弊ハ享樂主義デアル。ほいぐモ、凡テ溫和主義ノとおりいモ偉大ナル享樂主義者デアル。私ハ彼等ニハ益々辛抱シキレナクナツテ來タヤウニ思フ。此ノ世界ハ人ガ髭ヲ拈ツテ立ツテ居タリ、仕事ヲ傍觀シタリ、手袋ヲハメタ手ノ尖デ仕事ニ觸ツテ見タリスベキ世界デハナイ。人ハ眞面目ニ仕事ニ取リ掛カルベキデアル。カカル生溫イ麥ビタ混血兒ヨリハ、無神論ヲ奉ズル功利主義者、迷信家ノ徹底的とおりいノ方ガマダシモ望ミガアルノデアル。」

(2) 千八百三十一年二月七日ノ日記モ亦、彼レノ憂憤ノ餘瀝ヲ染メテ居ル。

「歐羅巴ハ騷擾、否ナ革命ノ狀態ニアル。今時分ニハ倫敦デ彼等ガ英國改良ノ問題ヲ討論シテ居ルカモ知レヌ。議會ハ先週開ケタノデアル。水曜日ニハソノ報知ガ得ラレル筈。時勢ハ變革ノ兆ニ充チ滿チテ居ル。一世紀間絶エザル動搖デ事ハ足ルダラウカ。ソレトモ二世紀カカラネバナルマイカ。彼奴等ノ議會改革ナンドハ取ルニ足ラヌ。始マリ（善及ビ惡ノ）ダ。ツイ、ソレダケノ事ダ。社會ノ骨組ガ全體腐ツテ居テ、薪ニスルヨリ外ハナイノダ。サウシテ新シイ骨組ハ何處ヘ行ツタラ得ラレルノダ？私ハ知ラナイ、誰モ知ラナイ。」

彼ノ英雄崇拜ノ思想モ亦國家社會ノ事ニ關シテ、ソノ表現ヲ得テ居ル。

(3)「國王ハ神權ニヨツテ支配スル、然ラザレバ全然支配スルヲ得ズ。神ヨリ命ゼラレタル國王ハ神ノ表象デアツテ、吾人ヨリ凡テノ服從ヲ要求スル事ガ出來ルデアラウ。併シカカル國王今何

(1) Froude, Thomas Carlyle, vol 1. p. 73
(2) Do. p. 77
(3) Froude, Thomas Carlyle, vol 2. p. 77

レニアリヤ。一番ノ善人――我等モシ彼ヲ見出ス事ヲ得バ――彼コソ卽チソノ人デアラウ。我等ニ告ゲヨ、我等ニ告ゲヨ。アア汝法典家、統計學者、經濟學者ヨ。我等如何ニシテ斯人ヲ見出シ、斯人ヲ帝座ニ上セム。若シ告グルヲ得ズバ、汝ハ罪唯々政治ノ科學ヲ知ラザルノミニアラザルヲ認メヨ」

千八百三十年ハ佛國ニ七月革命ガアツタ。英國ハソノ波瀾ヲ受ケテ、改革運動ノ火ノ手ハ燃ニナツタ。かあらいるハ其ノ新妻ト籠レルくれいげんばとつくノ幽棲ニアツテ、獨リ時事ノ非ナルヲ慨シタ。(1) 彼ノ此ノ頃ノ時評ニハ性急ナル過激派ノ思想ガ鳴リ響イテ居ルトイフ。かあらいるノ同情者ニシテ、かあらいる夫人ノ親戚且景仰者ナルぢえふりい、にぢんばら評論ノ主筆トシテ、ほいぐ黨ノ領袖トシテ有名ナリシぢえふりいハ、或ハ書ハ寄セ、或ハリザワザ陰寒荒涼ノ高地ニアルかあらいるノ僑居ヲ訪ネテ、かあらいるヲ、彼ガ矯激ナル急進思想ト考ヘタモノヨリ、正統ノほいぐ主義ニ改宗セシメントシタ。ぢえふりーノ心ニハ、無論親切ガアツタノデアル。彼ハかあらいるガ曠世ノ偉才ヲ懷キナガラ、ソノ狷介孤峭ヨリ荒涼ノ地ニ貧寒ノ生活ヲ行ヘルヲ見ルニ見兼ネタノデアル。彼ハソノ爲メ彼ノ友ヲ普通ノ人ノ世界ニ引キ下サントト試ミタノデアル。殊ニハ彼ハかあらいる夫人ノ爲メニ悲ンダ。彼ハ彼ノ所謂「花恥シキいぶ」ヲかあらいるノ醉興故ニ、くれいげんばとつくノ「呪ハレタル樂園」ニ委シテ置クニ忍ビナカツタノデアル。併シかあらいるハ彼ガ嘗テ母ニ宛ツル手紙ニ引用シタだらんべーるノ言葉ノヤウニ、眞理及ビ自由ヲ愛スル爲メニ、貧ヲ愛シタ人デアツタ。彼ハ敢然トシテぢえふりいニ下ラナカツタ。彼ノぢえふりいヲ評シタル日記ノ一節ヲ見ヨ。

「最モ高キモノ、彼ハソヲ他ノほいぐ黨員同樣ニ、唯ノ飾リ、副ヘ物ト考ヘルノデアル。人ノ大ナル務メ、彼ハ理智上ニ於テソヲ世ノ才人同樣ニ、幸福デアル事ト考ヘルノデアル。……彼ハ神トまむもんトノ中間ニ立ツテ居ル。而シ

(1) Froude, Thomas Carlyle vol. 2 p. 100.

テ彼一生ノ說教ハ兩者ヲ妥協サセヤウトイフ試ミデアツタ。コノ故ニ彼ノ俗受ケガアルノデアル。而シテコノ俗受ケタルヤ、世間ヲ見、彼ヲ見レバ容易ニ解ルコトデアル。併シソレハ二者何レニモ名譽デハナイ。」

ちえふりいノ優シキ心持、無私ノ態度ハ、併シ、かあらいるノ心ノ奥ニテ充分ニ認メ感謝シタトコロデアツタ。彼ハ同ジ日記ニイフ。

「私ハ彼（ちえふりい）ガイフヲ聞イタ。――愚昧ガ幸福ナモノナラ、私ハ馬鹿ニデモナラウ――ト。併シ彼ノ日常生活ハコノ教義ニ背反シテイフノデアル。――タトヘ善良トイフ事ガ最モ悲慘デアラウトモ、私ハ善良デアラウ」ト。

かあらいるガ、(1)彼ノさんしもん派ノ社會主義者ニ心牽カレタルモ、太凡コノ時代ノ事デアル。彼ハげえてニ送ル手紙ニ彼ノさんしもにずむニ對スル同情ヲ披瀝シタト見エ、げえてカラ、(2)危キニ近ク勿レトノ忠告ヲ受ケタノデアツタ。

(3)千八百三十一年十月十日ノ日記ニハ、彼ハ選擧法改正案ガ四十一票ノ多數ニテ葬ラレタ事ヲ



傳ヘテ居ル。同情ハ持チナガラ、餘リ重キヲ置カナカツタかあらいるハ別段感情ノ動搖ヲ示シテハ居ラヌ。併シ彼ノ憂國ノ至情ハ愈々益々厚キヲ加フルノミデアツタ。かあらいるノ心ノ奥底カラ發セラレタ次ノ聲ニ聞ケ。

(4)「ソレハ兎モ角、人ノ眞ノ義務ハ何デアラウカ。ソレハ全ク政治ニ遠カル事デアラウカ（ソノ日ソノ日ノ政治ニ遠カルベキハ無論ノ事ダガ、一般ニ社會制度ニ就テノ思索等ヲモ全ク廢セネバナルマイカ）。或ハ恐ラク、當代ノ缺乏ハ統治者ノ無限ノ缺乏、如何ニシテ自ラ統治スベキカノ知識ノ無限ノ缺乏デハアルマイカ。汝ハ幾分ニテモ人心ノ心ニ畏敬ノ念ヲ弘布シ得ルカ。然ラバソハ如何ナル他ノ事業ヨリモ遙ニ尊イ事業デアラウ。ソレハ藝術ニヨツテ成サルベキダラウカ。或ハ人々ノ心ハ猶藝術ニ向ツテハ閉デラレ、唯精々雄辯ニ向ツテ開ケテ居ル位ナモノダラウカ。さいすたあ（げえてノ傑作小說ニハ適セズシテ、タダといふえるすどれっく（があらいるノさあたあ・りさあたすノ主人公、ココニテハさあたあ・りさあたすノ書

(1) Froude, Thomas Carlyle, vol. 2p. 110
(2) 'Von der Société St. Simonien bitte Dich fern zu halten.'
(3) Froude, Thomas Carlyle vol. 2 p. 166.
(4) Froude, Thomas Carlyle vol. 2. p. 166-167

ソレ自身ノ代名詞トシテ用ヒラレタハアアル）ノ漸次ヨクナツタモノニシカニ適シナイノデアラウカ。三思セヨ、而シテ沈默ナレ。」

(1) 同ジ年ノ十一月十三日、かあらいるガ倫敦ノ客舍ヨリ弟ぢよんかあらいるニ宛テタル手簡ニモ、如何ニ深ク彼ガ時勢ノ急迫ヲ感ジタカガアラハレテ居ル。

「ぶりすとるニ恐ロシイ暴動ガ起ツタ。數百ノ人命ハ失ハレ、公共ノ建物ハ皆燒カレタ。……眞ニ英國ノ政治上ノ形勢ハ私ヲシテ駭魂セシムル。佛國革命ノ二ノ舞トハ明カニ豫想ノ範圍内ニアルノデアル。蓋シ今ヤ人々ノ間ヲ結ブ羈絆ハ何處ニモ一ツトシテ殘ツテ居ヌノデアル。到ル處、宮廷ニモ本山ニモ、厚顏ナル虛僞ガ今ヤ遂ニ虛言ノ罪ヲ證セラレテ立ツテ居ルノデアル。而シテ饑餓ニ瀕セル無智ノ民ハ、虛僞ヲ屠レヨ、虛僞ヲ屠レヨト叫ンデ居ルノデアル」。